

愛護センターだより

発行:敦賀市少年愛護センター

住所:敦賀市東洋町1番1号

電話:0770-23-0189 Fax:0770-23-0523

『青少年健全育成都市宣言』 都市:敦賀市

ジェンダー

社会によって作られた男性像・女性像など男女の別を示す考え方が「ジェンダー」。必要のない性差をなくそうとするのが「ジェンダーレス」「ジェンダーフリー」。

令和4年7月13日、スイスのシンクタンク「世界経済フォーラム」が2022年版「ジェンダー・ギャップ報告」で、日本の男女平等度は116位/146カ国であると発表しました。教育や健康分野ではほぼ男女平等となっているものの、女性議員や閣僚・管理職の少なさや収入格差など日本は世界に比べ大きく遅れているようです。「男だから…」「女だから…」という慣習にとらわれず、一人一人が違うことを認め合い、誰もが生きやすい社会にしていくなければならないのですが、なかなか進んでいないのが現実です。

そもそも、性というのは「白と黒」のようにきれいに2つに分かれるわけではありません。体の中で分泌される性ホルモンの量は、人や状況によって異なるため、性は多様性を持っており、流動的で、“グラデーション”のようなもの。

そうした認識が広まっていることから、全国的に性別の縛りをなくした制服の導入が広がっています。今年度から美方高・勝山高・丸岡高の3校で「ジェンダーレス制服」が導入されています。またこの夏、学校の水泳授業の水着も男女のデザインを同一にした「ジェンダーレス水着」が開発され、話題となりました。また、越前市では10月「パートナーシップ宣誓制度」が導入され、3組の同性カップルの結婚の宣誓を自治体が受理したというニュースもありました。ゆっくりとですが、確実にジェンダーレスの動きが進んでいます。

しかし、人々の多様性…ダイバーシティ (Diversity) …を受け入れる社会の動きはあるものの心配なことも…。認定NPO法人ReBitが2022年9月に、LGBTQなどの子ども・若者の声を集めるアンケート調査『LGBTQ子ども・若者調査2022』を実施し、10月に結果を公表しました (12~34歳までのLGBTQユース2,623人が回答…内中学生が3.3%の87人、高校生が11.8%の310人)。それによると10代のLGBTQ問題に悩む子は、この1年間で「自殺念慮」が48.1% (前年比3.8倍)、「自殺未遂」は14.0% (前年比4.1倍) という結果。また、親がLGBTQのことを「キモイ」と言うなど否定的であることを知り、91.6%が「保護者に相談できない」と回答。誰にも相談できずに、死を考へてしまうほど悩んでいる…というのが現状のようです。性自認で悩み、そのことを誰にも相談できず、違和感を抱えたままの生活している子ども達がいまいます。誰もが自分らしく生活できるような社会になるよう、いろいろな場面を通してこの問題に取り組んでいかなければなりません。



どうなる 部活動

スポーツ庁と文化庁は令和4年12月27日、公立中学校運動部・文化部活動の地域移行について、2023年度からの3年間で集中的に移行を進めるとした方針から「期間内の達成にこだわらない」と明記した部活動ガイドラインを公表しました。部活動改革の予算や指導者・活動場所の確保、参加する生徒の負担額、困窮家庭への支援、活動中の事故に対する保険の考え方などの課題から、2025年度までの達成が難しい状況となったためです。



ただ、地域移行は進んでいきますので、令和5年度入学生は、休日の部活動は「顧問の先生が指導したり、しなかったり」という状況から「部活動がない」「地域指導者のもとで練習する」という変化を体験することも考えられます。

上越市教育委員会は中学校の部活動を令和5年度から土曜日・日曜日を原則休みにする方針を示しましたが、その上越市が令和4年8月に中学生1・2年生2,387人にアンケートをとったところ、「休日でも部活動をしたい」と考える生徒が69%であったと発表しています (休日は活動を望まない生徒は13%)。

一方、進学塾「栄光ゼミナール」を運営する「栄光」が令和4年7月「中学校の部活動と勉強に関する実態調査」を保護者対象に実施し、その結果を8月に発表しました。部活動に対して前向きな印象を持っている保護者が多いようです。

メリット	
○ 部活動は勉強によい影響がある	65.0%
○ 人間関係が広がる	47.5%
○ 協調性・チームワークが身につく	46.1%
○ 礼儀を学ぶことができる	41.0%
デメリット	
○ 勉強時間が減る	41.5%
○ 特にない	36.9%

子どもの活動したいという思い、保護者の希望を叶える活動が求められます。

敦賀市の中学校では、月4回ある週休日の部活動を1回程度地域団体による指導者の元で練習できるように話し合いが進んでいるとのことです (部活動により地域移行が難しいものもあり、模索が続いているようです)。令和4年度には剣道や吹奏楽等が地域団体による指導を始めていますが、令和5年度には8団体が計画とその活動範囲を広げているようです。地域団体による練習は、希望者が参加する活動であり、部活動ではなくなります。他校の中学生と交流しながら、お互いに刺激し合い切磋琢磨し、技術力向上を図る活動となることでしょう。



中学校卒業時の「中学校の思い出」として振り返ることが多い部活動。「大変だった」「達成感があった」など、その思いは人それぞれでしょう。自分たちの時代とは社会背景や状況が異なることを認識したうえで、社会全体で子ども達の活動を考えていく必要があります。ただでさえ、コロナ禍で様々な活動が制限されてきた子ども達。子ども達が戸惑うことがないように、思う存分活動できる場をつかっていきたいものです。

